

入選

帰り道の空きかん

鹿児島県 鹿児島大学教育学部附属小学校

五年 石原 佳歩

「わっ、あぶない！」

学校の帰り、バスをおりて歩いていると、友だちが何かにつまずきそうになった。下を見ると、そこにはぶどうジュースの空きかんが転がっていた。

「よかったね、転ばなくて。」

わたしは、ほっとしながら友だちに言った。わたしは、4年生のとき、この歩道の近くで転び、ひざを大きくすりむいたことがある。血がくつ下までたれ、とてもいたかった。治るまでに時間がかかり、今でもあとが残っている。

「こんな歩道の真ん中に、だれが空きかんをすてたんだろうね。あぶないよね。」

と、友だちと話しながら、ふと歩道のわきにあるツツジの植えこみを見ると、葉と枝の間に、その空きかんと同じものがたくさん見えた。

「こんなにたくさんすててある。」わたしと友だちは、顔を見合わせた。

わたしは、心の中で（どうしよう。ひろったほうがいいかな。でも空きかんの数が多いなあ。今日は習いごとがあるから、早く帰りたいんだけどなあ。）と考えていた。横を見ると、友だちもどうしようかと考えているようだった。

（この空きかんを放っておいたら、またさっきみたいに、歩道に転がり出てくるかもしれない。それを、お年よりや自転車がふんで転んでしまったら、わたしが転んだときのケガくらいではすまないのではないだろうか。）

そう考えると、せすじがぞくっとした。

「ひろって、すてようか。」と、わたしが言うと、友だちもうなずいた。

まわりを見ると、今バスをおりたバス停の少し先に自動はん売機があり、その横にごみ箱が見えた。友だちと相談し、そのごみ箱にこの空きかんをすてることにした。あの自動はん売機でジュースを買って、こんなところにすてたのかと想像すると、少しはらが立った。

友だちと空きかんを二つずつ持ち、20メートルほど先にあるごみ箱へすてた。そして、また空きかんのすててある植えこみにもどり、二人でまた二つずつ持ち、またすててに行く。それを4回くり返した。植えこみの中に手を入れると、葉や枝が手やうでにちくちくとささり、いたかたりかゆかたりした。全てひろい終えたときには、手のこうやうでに、いくつも赤や白色のひっかききずがついていた。

「全部ひろい終わったね。おそくなっちゃったね。早く帰ろうか。」

そう言って、少し早歩きで家へ帰った。

空きかんは、そのまま置いていてもなくなることはない。たくさんごみのあるところには、すてやすいと感じるのか、どんどんごみが増えていくと聞いたことがある。あのままにしておいたら、まだまだ空きかんが増えたかもしれない。人や街のために、いいことをしたなと思うと、小さなきずのいたみが和らいだ。

次の日、何も落ちていない植えこみを見て、とても晴れやかな気持ちになった。